

進修同窓会報

発行 土浦一高進修同窓会 編集人 同窓会報編集委員会 委員長 遠藤俊夫 印刷 常陽新聞社



写真提供 奥村好太郎(高6回卒)・大久保滋(高8回卒)

創立百周年記念式典 盛大に開催される

去る十一月一日(土)、創立百周年記念式典が母校体育館にて、盛大に開催されました。招待者約五百名、全校生徒約千二百名、合計約千七百名の出席者がありました。式典の内容は以下の通りでした。(敬称は略させていただきます)

- 一、開式のことば
実行委員会副委員長 豊嶋貴
- 二、君が代斉唱
- 三、物故会員に対する黙祷
- 四、百周年記念事業経過報告
式典委員長 遠藤俊夫
- 五、学校長式辞
青山和義



式典で挨拶をする幡谷祐一 百周年記念事業実行委員長



校歌を斉唱する出席者1700名

- 六、記念事業実行委員長挨拶
幡谷祐一
- 七、PTA会長挨拶
谷中良雄
- 八、祝辞
茨城県知事 橋本 昌
(代理)茨城県出納長 角田芳夫
茨城県教育委員会教育長 齋藤佳郎
地元県議会議員代表 松浦英一
地元市町村長代表 土浦市長 助川弘之
(代理)土浦市助役 藤本明人
- 九、感謝状贈呈
(齋藤佳郎教育長より
幡谷祐一同窓会会長へ)

十、来賓紹介

全日制教頭 長南紀郎

十一、生徒代表挨拶

前期生徒会会長 内出崇彦

十二、校歌斉唱

十三、閉式のことば

定時制教頭 斎藤正五

式典に続き、母校の卒業生でもある慶應義塾大学文学部教授の南隆男氏(高十四回卒)によって、記念講演が行われました。演題は、『独立自尊』の時代―二十一世紀を生きる君へ―でした。

さらに、高校一回卒屋口正一氏の寄附金をもとに、幡谷祐一同窓会会長作詞、池辺晋一郎氏作曲で作成された土浦一高讃歌が、内田直美教諭の独唱で披露されました。午後は、会場を別に移して祝賀会が開かれました。往時を懐かしんでの交歓が、大変やかな雰囲気のもとで繰り広げられました。

なお、百周年記念事業につきましては、以下の通りになっております。詳細につきましては、『会報第54号』(平成九年六月発行)の第三面と第四面をご覧ください。

- 一、同窓会館兼アリーナ(進修記念館)の建設
- 二、創立百周年記念誌『進修百年』の発行
- 三、『創立百周年記念同窓会員名簿』の発行
- 四、倉庫兼部室の建設
- 五、部室・旧本館庭園の改修工事
- 六、百周年記念モノユメント設置

記念事業実行委員長 挨拶

幡谷 祐一

創学百年の祝典に当たりごあいさつ申し上げます。

私が会長に推され、就任して七年になりますが、この間、校長先生も、清水校長、大曾根校長、そして現青山校長と、三代も代わりました。私だけが代わらず今日を迎えたわけで、この栄えある創学百年の儀式を執り行えることに、人生最高の喜びを感じております。

思えば、昭和十一年、二・二六事件の起きた年の四月にこの学校に入学をさせてもらい、十六年春の卒業まで、戦争、戦争で青春を送ってきました。皇紀二千六百年を五年生のときに迎え、感激したことが思い出されます。

戦後、この学校は、着々と実力をつけ、今や日本有数の進学校に成長しました。このことは、今さら説明の要もありません。多くの先輩諸氏や同窓の方々が残された校風は今日も引き継いでいることと思ひ、感謝をいたしております。

今日の式典に全員をお招きできなかったことは誠に申しわけなく思っておりますが、出席されない皆様からも声援が送られていることと思ひ、この式を執り行います。

私は、親子二代にわたり同窓会長という名誉ある職に推されて今日を迎え、さらに、男兄弟四人全部、この学校に学ばせていただいたことに対し、大きな誇りを持っております。

今日は、県から知事さん、教育長さんをはじめ多数の方々のご出席を賜り、また、近隣諸学校の校長先生、市町村長さん、県議の方々など、今日の盛典に花を添えていただきましたことに心から御礼を申し上げます。

同窓会館兼アリーナ、県当局のご理解によって完成された多目的学習館など、新しき中にも伝統の様式美を備え、名実ともに日本有数の学校にふさわしい建築物ができました。後ほどご覧くださるようお願いいたします。また、多くの同窓生から多額の寄附をいただき、皆さんのご厚意に対して心から感謝をしております。

最後に、各学年幹事の皆さん、実行委員の方々、PTAの方々、また学校の職員の方々など、皆さんの応援なくしてはこの大事業の完成を見ることはできませんでした。心から改めて御礼申し上げます。

今日までの過程には、手違いやら意見の食い違い、不愉快なことなどいろいろあったと思ひますけれども、この私にご協力を賜り、百周年の式典を迎えることができましたことは、人生最大の喜びでございます。今後ともさらに自己研鑽をして、晩節を全うするよう努力する所存でございます。土浦一高、長く栄えあれ。

式辞

学校長 青山 和義

菊薫る今日の良き日、創立百周年記念式典を盛大に挙げて下さることは、本校にとりまして誠に意義深く、この上ない喜びであります。本日は公私ともご多忙のところ、茨城県出納長角田芳夫様、茨城県教育委員会教育長齋藤佳郎様をはじめ、地元県議会議員、市町村長など多くの方々にご臨席を賜り、衷心より御礼申し上げます。

さて、本校は明治三十年四月二十二日に茨城県尋常中学校土浦分校として、亀城公園にありました新治郡役所楼上において授業を開始したのがその歴史の始まりです。この一世紀は激動と困難な時代でしたが、県当局をはじめ、地域社会、同窓会、PTAなどの皆様のご支援、ご協力と旧職員の献身的な努力により、それを乗り越え、着実に発展できましたことに深く感謝申し上げます。この間、卒業生は二万四千五百有余名に達し、国内外の各界において、多くの方々がリーダーとして活躍されていることは、本校の誇りであり、在校生にとりましても大きな励みとなっております。

ここで本校の現状について申し上げます。近年、本校は大学進学の実績により、全国的に知られるようになりまして、その源泉は、長い年月をかけて築き上げてきた生徒との信頼感に基づく地道な教育活動にあります。具体的には、本校進路指導の三本柱である、授業の重視、個別指導の推進、そして学年指導体制の確立にありま

す。これからもこの三本柱を基に、生徒の意欲を引き出し、さらに教育効果を上げていきたいと考えています。

次に、教育の理想として掲げてまいりました「文武両道」は、運動部への加入率が約五〇%、文化部を含めると六〇%を超える生徒が日常的に部活動に参加しており、ほぼ定着しつつあります。部活動は、心身をたくましくし、社会性を養い、好ましい人間関係を育てる上で大切でありますので、今後も一層奨励してまいりたいと思います。

ところで、百周年記念式典を行う意義ですが、創立以来の歴史を振り返り、過去から学び、現状を正確に把握し、新たな目標を持って出発する契機とすることであり、このたびの記念事業につきましても、この観点から事業が計画されました。ここでは、主な二つの事業について申し上げます。

一つは、募金による進修記念館の建設であります。これは母校愛に燃えた同窓の方々、企業等の篤志寄附で賄われましたが、ご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。この進修記念館は、県費で建設されました進修学習館と一対をなすものであります。進修学習館は主として始業前および放課後の自主学習に、進修記念館は主として部活動に使用され、また両方の施設を使って合宿が行われています。両施設の名称に用いられました「進修」の出

典は、中国の古典『易経』の「君子進徳修業」にあります。これらことから、同窓の方々は、生徒諸君に、文武両道を実践し、高い知性を持ち、心豊かでたくましく生きる立派な人間になってほしいと願っておられるのだと思います。

もう一つは、百周年記念誌の発行です。この記念誌は、過去から学び、未来を展望する形で編集されています。過去の部分は、九十年記念誌を引き継ぎ、現在・未来の部分は、各分野で活躍しておられる卒業生の方々に、先輩としての豊富な経験を基に、人間としての在り方・生き方、在校生への期待などを語っていただきました。この内容から、同窓の方々は、生徒諸君に、大きな夢をもって困難に打ち勝ち、環境、エネルギー、福祉など人類の抱える困難な課題の解決に積極的に取り組んで欲しいと願っておられるのだと思います。

また、教職員には、そのよう指導してほしいと要望されているのだと思います。教職員・生徒一同、百周年に巡り会うことのできた幸運を喜ぶとともに、多くの方々から寄せられた期待をしっかりと受け止め、校訓の「自主・協同・責任」など良き伝統を引き継ぎ、国際化・情報化などに対応できる知恵と新しい時代感覚を身につけた人間として、本校をさらに発展させていきたいと決意を新たにしている次第です。

終わりに、百周年にあたりご支援ご指導をいただいた関係各位に感謝申し上げます。ご出席の皆様のご健康をご祈念申し上げます。式辞とい

生徒代表挨拶

前期生徒会会長 内出 崇彦

ただいまご紹介いただきました内出でございます。現在、土浦一高全日制普通科の三年生でございます。在校生を代表いたしました式典に参列いただきまして皆様にごあいさつ申し上げます。

まず、土浦一高百周年ということをご慶びと喜び、またお祝いを皆様とともに喜び、またお祝いしたいと思います。そして、戦前より優秀な卒業生を社会に送り出してきたこの伝統に、敬意を表したいと思っております。土浦一高の百年ということも思い、卒業生の皆様の実績の重さ、また、先ほどからいただきましたご挨拶の中に込められましたご期待の重さを感じ、その後に私たちが在校生がいるのだということ強く自覚いたします。

卒業生の皆様、卒業生の皆様は単に私たちが在校生よりも土浦一高で先に学ばれたというだけでなく、卒業された後も私たちのためにさまざまなご支援をいただきました。数え上げるとこれは切りがありませんが、最近の例で申し上げますと、進修学習館、進修記念館の建設というものがございます。ただいま私たちがこの二つを利用させていただいておりましたが、学習館の方は自習室として、朝夕静かな雰囲気のもとで使わせていただいております。また、夏には部活動の合宿所としても使わせていただいております。記念館の方は、普段の体育の授業、または部活動、さらには文化祭であります。「一高

祭」の会場の一つ、あるいは食堂として使わせていただいております。大変ありがたいことだと思っております。この場をお借りしまして、卒業生の皆様にご感謝申し上げます。

このように卒業生の皆様からつながってきている伝統というものが、土浦一高の力となっており、思っています。そして、その伝統を受け継ぎ、さらに意義あるものとしてつなげていくことが私たちに課せられた使命であると思っております。それに当たりましては、卒業生の皆様からいただきましたお力と、そして私たち自身の若い力をもってご期待に沿いたいと思っております。

現在、社会情勢を見ますと、非常に暗い話題が続いております。環境問題なども抱えまして、先行きに不安を覚える人も少なくありません。このような状況の中では、さまざまな側面から社会を支える人材が求められていると思っております。その点、土浦一高の果たすべき役割は非常に大きいと思っております。これから来る新しい時代、間近に迫った二十一世紀においても、土浦一高はさらに躍進を続けるものとして信じております。

最後に、土浦一高のさらなる発展、また、式典に参列いただきました皆様のご健康、さらなる活躍を祈念いたしまして、私の挨拶とさせていただきます。ありがとうございます。

記念講演会(要旨)

「独立自尊」の時代―二十一世紀を生きる君へ―

慶應義塾大学文学部教授 南 隆男(高十四回卒)



講演をする南教授

我々、心理学者、経済学者、社会学者、その他もろもろの人たちが今一生懸命取り組んでいる課題に「二〇二〇年問題」があります。現在の日本の状況を何も触れないでそのまま動かしていくと、二〇二〇年ごろに日本という国はなくなっているかもしれない。それが「二〇二〇年問題」です。

今、橋本首相が中心になって、日本の改革の基本指針をまとめています。その中で七つの改革といわれているのを見ますと、行政改革・財政改革・教育改革など、ありとあらゆるものの改革が含まれています。日本の現状を全面リストラクチャーするという、日本にとって歴史上の第二開国というような状況にあるのです。

どうしてこのような状況になったのでしょうか。「人間五十年、下天の内をくらぶれば、夢幻のごとくなり」。そういうことを言っている。自決した織田信長がいましたが、昭和五、六年ぐらいいまだ我々日本人の平均寿命というのは五十歳ぐ

らidedした。ところが、今や、人生八十年時代になってきた。六十五歳以上の人間が社会の中どのくらいのパーセントを占めるのか。これが高齢化社会の一つの重要な指標です。この率が日本ほど速い速度で伸びている国は、世界の歴史が始まって以来ないので、よく言われることですが、二〇二〇年ごろになると、四人に一人ぐらいの割合で六十五歳以上の人たちを、いろいろな意味で支えなくてはならなくなります。そうなったとき、日本は、高齢の方々を支えられる基盤が財政的にあるのか。社会の仕組みがそれを支えられるような柔軟な仕組みになっているのか。実は、全然なっていないのです。日本ほど豊かな国で、そういう基礎部分―インフラストラクチャーと言いますけれども、社会を支える基盤構造というようなものがきちっと組み上がっていない国も珍しいのです。こういう事情で、一挙に七つもの改革を動かさざるを得ないわけです。

今のままでいくと、二〇二〇年ごろには、うっかりすると日本が成り立たない状況になっていくかもしれない。もちろん、英知を絞って、多少一部が骨抜きになっても、いろいろな改革をやって次第に動いていくわけですから、日本という国がなくなるということはないはずですが……。実は、

今僕の話聞いて下さっている生徒の皆さんのもとに、この「二〇二〇年問題」は一番ドラマティックに展開されます。ですから、俺の人生を、私の将来を、どんなデザインにしようかなと、考えることがとても重要になってきます。大学に行つて、今までのように大学卒業という肩書、あるいは何々大学卒というような学歴だけではもう通用しません。東大に行つて卒業した、それだけでは通用しないし、それだけの人がバーツと広がつていっても日本の難しい局面は解決できないのです。我々の大学の塾長は経済学者の鳥居泰彦先生という方で、水戸一高出身の方ですけども、その方が「大学の使命は何か」というお話を、卒業式や入学式のときに学生に向かって話しています。鳥居塾長いわく、「大学というのは三つの重要な使命と機能がある。第一は文明の継承。第二には、知的な生産の継続。知識をつくり、新しい発見をすること。第三に、それらが実行できるような訓練をすること。その結果として個々人の人格を陶冶していくこと。この三つの機能を抜いては大学はあり得ません。このようなことをおっしゃっていますけれども、この三つの機能を果たすのは、なかなか難しい。今まではよかったわけです。そういうことを言いながらも、基本的には、平均的に、基本技能、基本能力を持った人間を社会の中に大量に送り出せば、それで日本はよかったですから。ぎりぎりの

ところを押さえて多少頑張つてくれる、そのような労働をする人たち、ワーツといってくればそれでよかったのですから。しかし、すでに現在の日本では、そのような戦略は通用しなくなつてしまいました。

そうなつてくると何が問われるのか。その人の創造性、その人が考えついてくれる新しいアイデア。抽象的なものを、現実に行力。日本としては、そういう人材を一人二人と増やしていかなければいけない、そういう局面になりつつあります。二〇二〇年、皆さんが四十歳になったころ、それをギンギンにできる最フロントの人たちなのです。ですから、そういうことを多少意識して、いろいろ考え、いろいろ頑張つてくれればすくなくいいのです。非常に押しつけがましくなるのですが、「頑張つてね」としか言いようがありません。僕らが生きてきたときとは違う。まして先輩がおられた時期とも違う。全く新しい時代が始まり出したのです。全く新しい時代の中で、皆さんは人生の花の時期の始まりの時を迎える。だから頑張つてほしいのです。でも、こういうことをやればいんだよと、そのメニューが今は出せない。そこは一人ひとりが、それこそ自主的に考えなくてはならないのです。

そういうことを最初に自明のこととして、覚悟しながら自分の好きなことをやってほしい。これは「独立自尊」という言葉にもつな

がります。「独立自尊」というまでもなく、土浦一高の重要な教育のスローガンというか校訓は、先ほど皆さんがおっしゃっていたように「自主・協同・責任」ですから、それらの意味をよく考えて行動して下さい。絶えず他人と比較しながら自分の状況を考えるというサイクルではなく、自分で自分の人生を設計して行って下さい。設計した方向に近づくために自分に足りないことがあれば、それも自分で自己投資していく。そういう感じで動き出して下さい。そして、さらに人並み以上の新しいこともやってほしい。そんな創造的な人間になってくれることを望んでいます。

創立百周年記念誌『進修百年』(B5版一九一頁)頒布受付中です。土浦一高事務室までお問い合わせ下さい。☎〇二九八(二二)〇一三七 頒布価格 三五〇〇円(送料別) ※『進修百年』の奥付の電話番号が間違つておりました。右記の番号にご訂正願います。

今後は、進修同窓会会報にご理解・ご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

編集後記

創立百周年記念式典より、早一ヶ月が経ちました。記念号編集にあたり、紙面の関係上、式典内容をすべて掲載できなかったことを深くお詫び申し上げます。今後とも、進修同窓会会報にご理解・ご協力を賜りますよう、よろしくお願ひ申し上げます。